The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	知覚表現における意味の上昇と下降
Author(s)	正保, 富三
Citation	大阪外大英米研究. 1994, 19, p. 19-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99166
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

知覚表現における意味の上昇と下降

正　保　富　三

1．意味の価値付け

ある単語の意味は、もともと中立的な意味であったのが、使われるうちに「良い」「悪い」の意味を帯びるものがある。たとえば、health という語は「健康状態」という意味であり、good health と poor health の両方があり得るが、healthy というと in good health の意味である。日本語においても「私は健康だ」というと、「健康状態がよい」という意味になる。

「運命」に関する語を見ると、fortune という語は本来 good fortune／bad fortune のいずれにもなりうるが、fortunate と言うと、good fortune のほうの意味に限定される。luck も同様、lucky と言うと、good luck の意味であって、bad luck の意味にはならない。

日本語では、「しあわせ」という語は、もともと動詞「しあわす（為合）」の連用形の名詞化であって、めぐり合わせ・運命・機会の意味であり、よい場合にも、悪い場合にも用いた（小学館『日本国語大辞典』）。同辞典には次のような用例が見出される。

「よきしやわせなり」（御伽草子）

「何とやらん、しあわせわるうて」（中華若木詩抄）

「段々造化（シアハセ）が悪くなり骨の折れかたもましたれば」（伊蘇普物語）

しかし、現代では「しあわせ」というと、「よいしあわせ」の意味に限られるようになった。

一方、fateful／fatal, destined, doomed などは悪い意味になる。日本語の「さだめ」も、無色の「きまり」「おきて」という意味から、「生まれる前から決められている、逃れられない運命」という、悪い意味へ傾斜してきた。

運命というものに対して、誰しも「よい運命であってほしい」という願望を抱く、それが fortunate, lucky などのよい意味への傾斜をもたらすのであろう。一方、「運命は逃れられない、恐ろしいものだ」という意識が fatal, doomed などの悪い意味につながるのであろう。

本稿では、人間の五感を表す語のうち、嗅覚と味覚を表す語の意味にどのような価値付けが生じるかを考察してみた。人間の五感のうちで、嗅覚と味覚を表す語は意味の価値付けが逆方向になろうとする。「におい」を表す語は意味が悪くなる傾向があり、「あじ」を表す語は意味がよくなる傾向があると思われる。

2．嗅覚を表す語

「におい」を表す語は英語では smell, scent, odor, aroma, fragrance, perfume などがある。一般的に、元来中立的な意味だった語が悪い意味になる傾向がある。

stink はもともと単に「匂い」という意味であった。*OED* に Obsolete sense として to emit a smell or vapour of any kind; to smell (sweetly or otherwise) という意味が載っている。名詞形の stench も Obsolete sense として an odour, a smell (pleasant or unpleasant) とある。それが、今は「悪臭（を発する）」という意味になった。

odour の原義は *OED* に that property of a substance that is perceptible by the sense of smell; scent, smell; sometimes spec. sweet or pleasing scent; fragrance とある。しかし、現代では *LDCE* によれば

odour =*rather fml* a smell, esp. an unpleasant one とある。

smell も一般的な意味の語であった。*OED* に that property of things which affects the olfactory organ, whether agreeable or othewise; odour, perfume, aroma; stench, stink と定義されているのが原義と思われる。現代の用例として、*LDCE* に次の例がある。Some flowers have stronger smells than others. /This new air freshener gets rid of smells fast. これらは中立的な意味である。しかし、この語も次第に悪い意味に傾斜するようになった。

scent は狩猟の用語に由来し、獲物の匂いをかぎつける意味が広がって、匂い一般を指すようになった。しかし、主にいい匂いの意味で使うようである。*OED* の定義では In wider sense: Distinctive odour. Now almost exclusively applied to agreeable odours, e. g. those of flowers. となっている。これは現在では悪い意味は生じていないであろう。

fragrance は *OED* に sweetness of smell; sweet or pleasing scent. とあり、「芳香」という良い意味に限られる。

これらの語の意味の上昇・下落の度合を把握する手掛かりとなるのは動詞形・形容詞形の意味である。名詞としての用法では、たとえば smell の場合、good smell/bad smell というように修飾語が意味内容を受け持つことができる。しかし、動詞・形容詞の形はそれ自身で意味を表現する。動詞で

His breath smells.

The meat had been left out for days and had started to smell.

(以上 *LDCE*)

といえば明らかに「悪臭」を表し、形容詞で smelly といえば「悪臭を放つ」という意味である。

上に列挙した名詞に相当する形容詞形が存在するのは、odorous／odoriferous, smelly, fragrant などである。

odorous は *OED* に emitting a smell or scent; scented, odoriferous; more usually, sweet-smelling; frangrant とある。odoriferous のほうは、that bears or diffuses scent or smell; odorous; fragrant; rarely, of an unpleasant odour. とあるから、中立的ないし良い意味である。smelly は unpleasant-smelling とう意味である。fragrant は sweet-smelling という、良い意味である。

これらの動詞・形容詞形の意味が名詞形の意味にも通じると考えると、現代では smell－odour－scent－fragrance の順で中立的な意味からいい意味にわたっているように見える。われわれが表現に当たって単語を選択する場合、どの語を選べばよいかの目安を知りたい。

現代では stench は「悪臭」であり、fragrance は「芳香」だという意味は定着していると見てよいであろう。scent は悪い意味には使われることはなさそうである。残るのは smell と odor である。この2語はどちらも良い意味の形容詞も悪い意味の形容詞もつく。その修飾語によって良い意味にも悪い意味にもなる。しかし、どちらの意味に使われる傾向が強いかを見るためにコーパスの用例を検索してみた。

3．smell とodor の用例に現れた傾向

BROWN CORPUS と LOB CORPUS における smell、odor／odour の全用例を検索した。当然のことながら、アメリカ英語である前者には odor の語形のみ現れ、後者には odour の形のみが現れた。それぞれの語について、(1)良い意味の例 (2)悪い意味の例 (3)中立的な意味の例の3種類に分類した。例文は次のようなものである。

SMELL

(1) 良い意味

But the leaves gave off a warm, soaking smell, the pain in his head lifted, and he felt refreshed. —LOB K03:100 (以下10例省略)

(2) 悪い意味

One's impulse is to say that the smell was a stink and unpleasant. —BROWN G04:1490 (以下6例省略)

(3) 中立的な意味

All Christendom has surely been enriched by Fox's striving for direct access to God and his joy when he felt he had attained it and 'the whole earth had a new smell.' —LOB D05:104 (以下23例省略)

ODOR／ODOUR

(1) 良い意味

By delicate application of odours and richly-distilled perfumes, these refined voluptuaries aroused the fainting appetite and added a more exquisite and ethereal enjoyment to the grosser pleasures of the board. —LOB F07:72 (以下2例省略)

(2) 悪い意味

In the summer of 1960 the oxidation pond became completely septic and emitted obnoxious odors. —BROWN J70:0330 (以下7例省略)

(3) 中立的な意味

It is said that fear in human beings produces an odor that provokes animals to attack. —BROWN D07:0660 (以下17例省略)

以上のような分類によって集計した結果は次の通りである。(数字は用例の数)

	smell (LOB)	smell (BROWN)	odour (LOB)	odor (BROWN)
良い意味	2	9	1	2
悪い意味	4	3	2	6
中立的な意味	10	14	4	14

この数字を見る限り、smell や odour／odor が良い意味で使われるか、悪い意味で使われるかというはっきりした傾向は現れていない。むしろ中立的な意味で使われる場合が多いことが分かる。つまり、名詞としての用法では smell と odour／odor に際立った差はなく、修飾する形容詞やコンテクストによって良い意味になったり悪い意味になったりするようである。

他方、上に触れた動詞形・形容詞形の smell, smelly などを見れば、これらの語形においては意味は原義から下降線をたどっていることが明らかである。

日本語の「にほひ」は古くは「あざやかに映えて見える色合い」を意味し、それが「匂い」の意味に転用されるようになった。もとは良い匂いに限られていたのが、次第に悪いにおいにも使われるようになった。ここにも意味の下降が生じている。

4．味覚に関する語

taste はもともと中立的な「味」という意味であるが、「味がある」ということは良いことであると見られる。形容詞のtasty は「おいしい」という意味であり、tasteful は「趣味が良い」という良い意味である。「味がない」ということはマイナスの意味になる。*OALD* の用例 a wine that has no／very little／not much taste は、ワインの評価としては否定的なこと

ばであろう。*LDCE* の例 This cake has no taste／very little taste. も同様だと思われる。「まずい」と言うのでなくても、そこについているべき味がないということは、食品としての価値が少ないことになるであろう。tasteless は食物について言うときは having or showing no taste; not tasting of anything: tasteless soup (*LDCE*) で、やはり否定的な意味を持つであろうし、比喩的な意味では having or showing bad taste: a tasteless remark (*LDCE*) と、マイナスの意味で使われる。

日本語で「あじない」というのは古くは「味がない」という意味とともに「まずい」という意味であった。現在でも方言に残っている。比喩的な用法で「あの人の話には味がある」というと、ほめた言葉である。

5．意味の上昇・下降の要因

healthy, fortunate, lucky などの語が良い意味のほうになるのは、一般的に、人間はものごとの明るい面を見ようとする傾向があるからだとも考えられる。嗅覚と味覚において意味が反対の方向に働くのはなぜであろうか。食物がにおいがする場合、それは腐りかかっていて危険だという信号である。人間の嗅覚はこの危険信号をキャッチするのが重要な役割であると思われる。一方、飲食物に味がついているということは食物としての価値を高める。そのような事情が作用して、語の意味が良い方向にまたは悪い方向に向かうのではなかろうか。

人間の五感はこのほかに視覚・聴覚・触覚がある。国広哲弥氏によれば、このうち視覚と聴覚は、ふだんそれが働いていることをまったく意識しない感覚であるがゆえに、それを意識するときはある特別な意味が生じる。ちょうどわれわれが胃腸の存在を日常意識せず、それを意識するのは何か内臓に異状があるときであるように、目や耳の存在を意識するのは、不快なものを知覚したときである。「目ざわりだ」というのは、「不快なものが目に映っている」という意味であり、「耳ざわりだ」というのは「何かの音が不快にひ

びく」ことを意味する。これに対して触覚はその都度意識する感覚であるから、「手ざわりがいい」「肌ざわりが悪い」など、快・不快の両方に用いられる。

嗅覚と味覚は触覚に似て、快・不快の両方に用いられ得るが、上述の理由で嗅覚を表す語は悪い意味に、味覚を表す語は良い意味に傾斜しやすいと思われる。

参考文献

Ann-Mari Fåhræus. 1984. *Two Kinds of Syntactic-Semantic Value-Loading in English*. Stockholm: Almqvist & Wiksell International.

国広哲弥. 1989.「五感をあらわす語彙——共感覚比喩的体系」『言語』1989年11月号

使用辞書

The Oxford English Dictionary. OUP. 1933. [*OED*]

Oxford Advanced Learner's Dictionary. OUP. 1989. [*OALD*]

Longman Dictionary of Contemporary English. Longman. 1987. [*LCDE*]

日本国語大辞典. 小学館. 1975.

使用コーパス

Brown University Standard Corpus of Present-Day American English. 1964. [BROWN]

The Lancaster-Oslo／Bergen Corpus of British English, for Use With Digital Computers. 1978. [LOB]